

# 『多様性を尊重する社会を』

朗読者 尾木直樹

6 教育の現場は、まさに社会の縮図です。

教室にはいろいろな子どもたちがいます。内気な子、おしゃべりな子、運動神経が良い子、声大きい子、などなど。そうした集団では、結びつきを強めるために、異質に見える存在を排除しようとする心理が働きます。見た目や考え方、話す言葉：理由はなんでもいいんです。時には非常にささいなきっかけから、「自分たちと違う」「グループからはずそう」ということになってしまうのです。

15 以前、いじめ問題のシンポジウムで、参加した女子高校生からこんな話を聞きました。小中学校の女子はよくグループでおそろいのものを買ったり、身に付けたりしたがりますよね。でも、家庭の事情で買いたくても買えない子は断らざるをえない。お揃いにしようよという誘いを何度も断っていると、「なんで私たちの誘いを断るの」「付き合い悪い」「シカトしよう」となるのです。

20 こうした思春期の特性として「ピアプレッシャー」、つまり、仲間同士が同調しようという圧力があります。子どもたちが精神的に自立しようとする中で、親や周囲の大人に対して反抗し、

その反動として友だちへの依存が強まる。だから、みんなと同じように振る舞おうとしたり、鞆につけるキーホルダーもお揃いにしたりするの。一緒であることで、お互いを確かめ合い、安心感を得ているんですね。裏を返せば、その分、異質に見える存在を排除しようという心理も強く働くということですよ。

これは子どもたちだけではなく、大人を含めた社会全体で考えるべき問題だと思います。

しかし、みんなと同じであることが、本当に安全で安心なものでしょうか。当たり前前のことですが、私たちは一人ひとりみんな違う個性を持っています。互いにそれぞれの違いを認め、受け入れることができれば、それぞれがもつとありのままに輝くことができるはずです。

社会が多様性を増す中、今後は自分をしっかりと持って、主体的に物を考えると同時に、異なる価値観を持つ人々と協働することがよりいつそう求められていきます。

お互いの違いを認め、多様性を尊重する豊かな社会をつくるためにはどうしたらいいのか。私たち大人が子どもと共に考え、一緒に学んでいく必要があると思います。